

---

# ボクスポット！ 剣と銃

藤村文幹

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ボックスボット！ 剣と銃

### 【Nコード】

N6323Z

### 【作者名】

藤村文幹

### 【あらすじ】

中学生の保治は最新のオモチャ、ボックスボットのユーザーだ。

プラモデルにチップを埋め込み、筐体にセットすればそこはロボットのコックピット。遠い遠い星で戦いを繰り広げる戦士の心臓部になる。

## ブローグ

砂塵が舞い、的に当たらなかった弾が荒れた大地に突き刺さる。

惑星 コリオンでは今日も一対一の決闘が繰り広げられる。機械の巨人が走り、舞い、互いの位置をめぐるしく変えながらお互いを墜とすため銃弾を撃ち合い続ける。

流線を多用したスマートな黒い機体は弾を体捌きと走りのスピードだけで躲し、決定打に欠ける弾丸を撃ち続ける。もう片方の重厚で線の多い赤い機体を持ち前の装甲で耐え続け、軽い弾幕で黒い機体の動きを制限し、右肩越しに伸ばした青白い電光を纏う二本の電極を黒い機体に向けスナイパーのように機を待つ。

黒い機体が崖になった地形の手前で進路を180度変える。その瞬間、速度ゼロの隙が生まれた。

「くう！」

赤い機体の右肩から光が溢れ、極光粒子砲が放たれる。

保治はそのビームを操作により曲げていた関節を急伸展し、逃れる。ビームは刹那前に黒い機体の脚があつた空間を貫き、崖に穴を開ける。黒い機体の装甲が熱で歪み、着弾地点には砂岩が溶けてトンネル状の穴が開いている。同時に脚部関節から警告。予定されていた伸展タイミングを早め通常よりも速く伸展したため、関節部耐久力が減少したのだ。

貰ってしまったら一撃、そう保治に思わせるには十分だった。ただでさえ、細かく速い弾幕を避けきれずに当たってしまったているのに。

『やるね』

保治はその余裕のある声に焦燥感を覚える。敵の防御力は想像以上。こちらの火力は足りない。このまま遠距離から撃ち合っても勝てないだろうと推測する。

現在保治のピッケメルクーリオは電磁ヒートナイフとマシンガン、

それと前方散布爆雷が装備されている。マシンガンは決定打にならない。爆雷もナイフも遠くまで届かないが、両方に叩き込め勝機は見える。勝つためにそれしかない。

だからこそ、保治は迷いを残しながらも勝負に出た。

赤い機体の周囲を一定距離を保って回るように走っていた軌道を変え、一気にまっすぐ接近。まずは爆雷だ。腰の位置から前方に大量にばら撒くタイプの爆雷を一発でも多くのにぶつけて、装甲を削ぐのだ。

しかしその先は弾幕の中心。弾の密度も勢いも増し、また相手にとっては大砲が当てやすくなるだけだ。赤い機体は当然のように右肩越しに伸びた二本の電極　大出力ビームカノンを保治の黒い機体に向ける。

しかし保治は発射タイミングを見切っている。赤い機体がビームを発射する直前に進路をずらし、避ける。そして発射硬直の隙を突いて近距離から爆雷を散布。

『うおッ！？』

赤い機体の表面や地面に着いた爆雷が次々と爆裂していく。保治の機体に赤い機体が出し続ける弾丸とは別に大小の赤い装甲破片が掠め、被弾する。

接近までにかんりの被弾を許してしまった。だが、爆雷により相手の機銃と頭部メインカメラは潰せた。あとはナイフを突き立てるだけ。

ブースターを一瞬だけ噴かしてナイフを振りかぶる。保治の機体は前方への大きなベクトルを得て空中を滑るように赤い機体い接近する。ナイフが赤熱する。

が、距離が足りない。保治が着地したのはナイフを突き出しても届かない位置。ブースターの噴かしが足りなかったのだ。保治の操作によりナイフは空を裂き、なにもない空間に突き出される。

「これでっ！」

保治は即座にミスしたと判断し、一瞬の迷いの後に前に出ること

を選んだ。ナイフを突き出した姿勢のまま地を踏みしめ、蹴り抜ける。反作用により保治の機体は前に出ようとするが、保治の操作が追いつかず、脚を前に出せずに倒れ込んでしまう。機体と地面の間にナイフを持った右腕を挟み込んでしまい、多量の不可が掛かって関節が耐えきれずに曲がり壊れてしまう。ナイフも地面に刺さり、柄が機体の胸部装甲に強い衝撃を与えてしまう。

『えっ、ちよっ！！　んなあ！？』

対戦相手の驚く声と対戦終了のブザーが同時に鳴った。

\*\*\*\*\*

「ま、負けた？」

画面には大きく「YOU　LOSE」と表示されている。ただでさえ薄い装甲の機体が至近距離で弾幕を張っている機銃の掃射を受けたのだ。そこに腕と胸部、そして操作ミスによる転倒ペナルティの3重ダメージ。その結果機体ヒットポイントはゼロ。

『え、えええ、俺今負けたと思ったのに』

スピーカーから対戦相手の呆れ声。

『おたく、その機体合っていないんじゃない？』

遠く離れた街から回線越しの対戦。かなり前から存在する枯れた技術の再利用。それによってボクスボットという遊びは幅を広げている。

「それは分かってますけど……新しい機体を買うお金がないんです」

『あ、学生さんか。ならしかたないかな。ただどねえ、もうちよつと装甲増やしてでかいキャノン砲積んだほうがいいんじゃない？』

射撃は上手いんだし』

かつての敵からの親切かつ適切なアドバイス。

対戦後の談話タイムは5分程度。望むならOFFにも出来るし延長もできる。電話番号も映像だって送れるサービスタイムだ。

「でもそれだとピッケメルクーリオの特性を殺しちゃうし」

保治は自分のボクスボットをカメラに移るように持った。

高さ30センチくらいのロボット。それがボクスボットだ。ゲームセンターにある機械にスキャンさせて、対戦ができる。そういうハイテク玩具。カスタム性の高さも人気の秘密である。

『それでも。見たところまだ構成に余裕があるみたいだし。射撃タ  
イプに転向したほうがいいよ』

相手の男はかなり遊んでいるようで、保治のボクスボット構成を  
見抜いていた。

『あ、そろそろ時間だね。もっと強くなってまた対戦しようね、え  
ーと、トレジャー君？』

男が保治のパイロットネームを言った直後に談話タイムが終わっ  
た。画面が暗くなり、狭いコクピット風筐体のドアが開いた。

保治は親切な男性に多少の罪悪感を抱く。

「返事、しそびれちゃったな」

親切にされたら「ありがとう」。それが当然と思っている保治に  
は、今の対戦相手にお礼を言いそびれたのが残念でなかった。

## 1 独白と学校のこと

撃賀保治、14才。とてもハイテクなホビーであるボクスボットを初めて半年になる。最初にお年玉で買ったピッケメルクーリオを改造しながら使っているが、彼には自分の限界が見えてきた。

ピッケメルクーリオは簡単に言えば高機動格闘タイプ。しかし彼は速度を出している時の機体操作が苦手なのだ。ほぼ出来ない、と自分で考えている程だ。それに格闘戦、というか接近戦全般が不得手で、相手の攻撃に対してとっさの判断が出来ない。

合わないのだ。壊滅的に。

彼自身が思い続けている。

「僕と、ピッケメルクーリオは合わない」

付属している武器は剣だけで、他の武器はみんな保治の少ない小遣いからなんとか捻出している。その中でも使いやすい武器はやっぱり射撃系ばかりだった。それも中遠距離から狙い撃つタイプのものばかり。だがピッケメルクーリオはそういうものを撃つためには「構え」をする必要がある。それにパーツの射撃武器に対する適性が低く、狙撃時のブレが大きい。

だから保治は呟くのだ。新しいボクスボットも買えず、今あるボクスボットの能力も引き出せず、自分に合わせた改造に踏み切ることは出来ないう自分の不甲斐なさや弱さを嘆きに込めて、彼は呟くのだ。

「やっぱり、僕とピッケは合わないんだ」

\*\*\*\*\*

悩んでいるだけでは問題は解決しないし、時間は過ぎる。

親切なおアドバイスを受けた翌日の朝。保治は学校にいた。何のことではない。学生である以上、学校には通う義務がある。友人もそれ

なりにいるし、勉強もそこそこ出来る保治にとって学校はめんどくさいけど来なければいけない、といった程度の物だ。

毎日パターン化した問答をすればいいし、時折起こるイベントもなにも考えず楽しめばいい。そして友人は、最初の印象のまま、ほぼテンプレート化した話題を提供してくる。

しかし今日、この時は違った。

「保治、ちよつといいか？」

自分の席についた保治に、クラスメイトである剣介が話しかけてきた。背が高くて運動神経抜群。女の子が好きで派手好きのムードメーカー。そう保治は彼を断じている。彼が女の子にもてたいもてたいと周囲にわめき散らすのを保治はよく目撃していた。その願望が叶ったという話は聞いていないが。

「どうしたの？ 珍しいね、剣介から話しかけてくるなんて」

保治と剣介はとくに仲がいいわけでもなく、言わばただのクラスメイト。保治には何故彼が自分に話しかけたのか分からなかった。

「俺さ、お前が前言ってたやつ始めたんだよ。ボックスボット」

そう言って剣介は手に持っていたナツプサックから大きな箱を出す。プラスチック製で、ボックスボットを保管・運搬するための専用ケースだ。サイズによって様々な製品が用意されている。

保治には彼がそれを持つている目の前の現実に驚愕した。保治が今まで彼を見てきたなかで、彼の一番の興味は女の子にもてることであり、そのための努力を惜しまない男なのだ。その小遣いは大抵ファッションや雑誌、話題作りのための音楽や楽器などに費やされる、ハズだった。もっともその努力が実を結んだという話を保治は聞いたことがない。

「君が、ボックスボットを？」

思わず問うてしまった。

「ああ。これ見りゃわかるだろ？」

事も無げに答える剣介。そのボットボックスはかなりの大型で、それは大型ボックスボットか大きい武装か、もしくは多くの武装やパ



ーツを詰め込んでいることを意味する。どれにせよ、かなりの資金をつぎ込んでいることは用意に想像できた。

中身を見てみたい。彼がどんなボックスボットを選んだのかが知りたい。保治は初めて彼、剣介に興味を持った。頭の軽そうな剣介を、保治は無意識的に見下していたのだ。

保治は驚愕を隠しきれず、多少の躊躇を顔に出す。悟られないように顔は剣介のボットボックスに向けたまま、聞いた。

「開けても、いいかい？」

保治の要望に剣介は朗らかな笑顔を見せていいよ、と言った。人当たりのいい、明るい笑顔だ。

保治はボットボックスの留め具を外し、開けた。思わず感嘆の声を上げる。周囲の騒がしい音が消えるような衝撃。

プロメテウスハーツ。発売されたばかりの射撃型重装ボックスボット。重厚で安定感のある角張ったフォルムは発表当初からネットで賞賛の声が上がっていた。値段はピッケメルクーリオのような初心者用ボックスボットの倍以上、スペックも値段相応。間違いなしの上級者向け高級高性能機　プロメテウスハーツ。

思わずため息が漏れる。本当に始めたばかりらしく、サイズの大きなボットボックスには多くの空きスペースが余っていた。それでも、プロメテウスハーツの異様な存在感は保治に何かを主張していた。

「へへっ。かつこいいだろ、俺のボックスボット」

「う、うん……」

剣介の軽い自慢に保治はおざなりな返事をし、保治は名残惜しげにボットボックスの蓋を閉める。これ以上見ては欲しくなってしまう。アドバイスを欲している彼に、かつこわるいとは見せられないという単純な自尊心から、保治はそうした。

「で、物は相談なんだが」

剣介は保治がボットボックスから手を離すと、それを鞆にしまいながら話を切り出した。

「俺、昨日コイツでプレイしたんだけどさ。どうも上手く出来ないんだよな。他の人らとか、対戦相手とかは簡単に動かしてたのにさ」  
啓介は声のトーンを低くして、少し落ち込んだように続ける。

「店で一番かつこよくて性能がいーらしいのを買ったんだけどなあ。俺下手なのかな？」

保治の目には確かに元気がないように見えた。

保治には剣介が上手く動かせない理由は分かっている。ネットやスペックから容易に結論は下る話だったのだ。

プロメテウスハーツは確かに性能は良い。だがその性能相応に扱いつづらく、特に火器管制の猥雑さとそれから来る機体制御の難しさはユーザーを全力で置いてけぼりにする、上級者向けボクスボット、それがプロメテウスハーツなのだ。性能故に操作が難しいというのは、値段帯の高いボクスボットに共通する性質であり、プロメテウスハーツだけの問題ではない。

しかし今の保治にはそんな剣介を愚かだと断ずることは出来なかった。保治もピッケメルクリオを殆ど見た目だけで選んだのだ。

武器が剣一本という潔さも気に入っていた。何より少年のころ好きだったあのロボットに似ていたのだ。だから、自分も似たようなものだと保治は考える。

「このプロメテウスハーツみたいに値段が高いやつは上級者向けなんだ。」

保治は表情が変わらないように努めた。彼を笑うことが出来ない保治の、せめてものかつこつけだった。

「特にプロメテウスハーツは射撃武器を沢山積んでるからね。余計に難しいと思うよ？」

分析、というほどのものでもない。ネットでみたレビューそのままだ。

「そうかー高いから強いって思ったんだけどなあ！」

剣介がわざとらしく大仰に天を仰ぐ。しかしこのままほっといて、剣介がボクスボットをやめるのは、寂しい。ボクスボットの値段が

中学生のプレイ人口を狭めているとはいえ、本体さえ買ってしまったらあとは無改造でも何とかなる遊びなのだ。しかし保治の友人に、他にボクスボットをやっている者はいない。

「なあ、ちよつといい？」

だから、保治は剣介をやめさせないための方策を、思いついた。

「僕のボクスボットで一度遊んでみないか？」

## 1 独白と学校でのこと（後書き）

書き溜め分を消化したら暫く開くと思います。  
書き溜め分はまだまだありますが。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6323z/>

---

ボックスボット！ 剣と銃

2011年12月21日12時50分発行